



東京油問屋市場 第119回起業祭を開催

と き 平成31年3月25日（月）17：00～18：45
ところ ロイヤルパークホテル（東京・中央区）

東京油問屋市場では第119回起業祭を開催した。

第1部の『式典』では、館野洋一郎理事長の式辞朗読に続いて、金田雅律副理事長が今後のさらなる発展を祈念し、盛大に油締めを行った。

第2部の『懇親パーティ』では、はじめに館野洋一郎理事長が「油は、江戸時代から明治の初めまで主に灯としての役割をしていた。その後、油は食品として使われるようになった。江戸時代には天ぷらが登場し、その後は洋食などで揚げ物が普及し、油業界も時代が大きく変わる中で進化を遂げてきた。当市場が創立した当初から、油は日本人にとって貴重な栄養源となっている。最近では経済状況の変化や生活様式が変化する中で、伝統をきちんと受け継ぎながら、未来に向かって時代の変化に対応していくことが大きな問題だと認識している。現在、各方面の関係者の皆様の協力を得ながら、全国の油脂販売業を営む仲間たちとともに、それぞれの従業員を対象としたセミナーを実施している。このセミナーは、食生活の変化、多様化、さらには高度化が進む中で、われわれ油脂販売業者が時代の流れに対応するための学びの場と位置付けている。そして、油の価値を正しく理解して、その価値を伝える力を養う場でもある。さらに、それにとどまらず、油の新しい価値を創造していく、こうした活動につなげていきたい。今後も諸先輩方が築いてきた伝統を重んじながら、一方では時代の変化に合わせて、セミナー以外にもいろいろな取り組みを進めていくための勉強と相談も始めている。来年の120回の起業祭を一つの契機として、さらにその先の時代に対応していくために、業界の仲間とともに今後も努力をしていきたい。」と挨拶した。

その後、来賓挨拶として一般社団法人日本植物油協会の上野史尚会長(株J-オイルミルズ社長)は「平成の時代は大震災をはじめ、さまざまな自然現象が多発したが、一方で、わが国経済は世界経済に支えられ、緩やかな回復傾向をたどってきたものと思われる。この週末はイチロー選手の引退報道でもちきりだったが、今までの彼の努力を改めて感じる事ができたと同時に、積み重ねていくということが本当に大変なことで、重要なことであると痛感した。そういう意味では起業祭として119回目で、1660年から359年の長きにわたる東京油問屋市場様の歴史の重さを改めて感じた。最近ではマスメディなどを通じて油の価値がフォーカスされ、積極的に摂取したほうが良い、という風潮が高まり、大きな追い風となっている。ただ、足元をみると経済環境の厳しさは変わらず、特に若い世代を含めて将来に対する不安などから、なかなか消費が向上かない状況だ。また、物流費の高騰、人件費の上昇という問題も顕在化している。東京は人口が増えていることもあり、なかなか実感しにくいのが、地方では市場が伸びない中で、人手不足から結果的に人件費が高騰するという課題に多くのお客様が直面し、全国的にもその流れが拡大するのではな

いか、と感じている。そうした中で、当協会会員各社は安定的に成長を続けるべく価値を発信し、事業構造のありようについても協会内で検討を始めている。産業として安定期な成長を実現していくためにも、製販の枠組みを超えて事業の成長を実現していきたい。伝統を守りながら新しい姿を創っていくという館野理事長様の考えと当協会の方向も同じ考えにある。東京油問屋様のさらなる事業発展のために、当協会も微力ながら尽くしていきたいと考えている。」と挨拶された。

乾杯音頭は全油販連宇田川公喜会長が行ない「桜も咲いて、来週には新しい元号が発表され、5月1日に126代目の天皇陛下が誕生する。万治3年に東京油問屋場の前身の寄合所ができた時には、111代の後西天皇、徳川家綱の時代だ。当時は一元号一天皇ではなく、後西天皇の時は元号が4回変わっている。明暦の大火の後に「よろずおさまる」という意味で万治という元号に後西天皇が変えたという。また、119年前は明治天皇の時代だった。東京油問屋市場も来年起業して120年になるが、200年、300年と続くであろうし、最近のはやりのことばで表現するとサステナブルな業界にするためには、適正な利潤と適正な油価での販売が必要だと思う。製販一体となって頑張ってきた」と述べた。

最後は島田豪副理事長が油締めで、起業祭を締めくくった。



館野理事長の式辞朗読



金田副理事長の式典油締め



日油協 八馬会長の来賓挨拶



全油販連 宇田川会長の乾杯



島田副理事長の油締め

(写真提供 油脂特報社)